

## 動物の不思議な行動

アニマルフォトグラファー  
トラベルライター

平 岩 雅 代

今年も野生動物の赤ちゃんが誕生するシーズンの2月から3月にかけて、3回ケニアとタンザニアを訪問、さまざまなドラマを目の当たりにしてきました。

草食獣と肉食獣とがサバンナ(大草原)で繰り広げる生と死のドラマ、真剣勝負は言うまでもなく、予想もできない意外な野生動物の一面を見る機会に恵まれ、つくづく面白い世界だと感じました。

日本の動物園やサファリパークとは違い、何も柵も何もない広大な平原がそっくりそのまま“ナショナルパーク”(国立公園)や、“ゲームリザーブ”(動物保護区)として守られ、動植物の生態系が保たれているのが、アフリカです。

文字通り“野生の王国”である各地域の中に暮らしているライオン、ヒョウ、チーター、ハイエナなどは自分の力で獲物を手に入れます。一方、ゾウ、キリン、シマウマ、カバ、サイ、インパラ、ヌーなどの草食獣は、自分の力で身を守ります。ほんの少しの油断が生死を分けるのです。

一見のどかに見えるサバンナでも、実は毎日のように肉食獣と、草食獣との闘いが行われています。

ある時、ライオンがシマウマの隙を見事

につき、襲撃に成功しました。シマウマはその場に倒れ、ライオンは満足そうな様子でシマウマの横に座りました。するとそこに大きな牙のアフリカゾウが近づき、ライオンとシマウマの前に仁王立ちに立ちはだかりました。

いったい何が始まるのかと驚く私たちの目に映ったのは、首を持ち上げてヨロヨロと立ち上がるシマウマの姿でした。シマウマはライオンの最初の襲撃のショックで気を失ったものの、絶命してはいなかったのです。



写真1 ふだんはおとなしい  
アフリカゾウ

弱々しい足取りで逃げ出したシマウマと、意表を突かれて追いかけようとするライオンとの間に、先程のアフリカゾウが再度割って入りました。今度は明らかにライオンに対する不快感を表わした威嚇の態度で、鼻を上げ、耳を大きく広げて見せました。

あまりに激しいアフリカゾウの様子にライオンは一瞬ひるんで後退しましたが、すぐに気を取り直してシマウマのあとを追いました。

そして遂にシマウマはライオンに追いつかれ、倒されてしまったのです。

この珍しい出来事を現地の動物の専門家に話したところ、いわく「常識では考えにくいことだが、同じ草食獣としてアフリカゾウがシマウマの肩を持った、という考え方もできる。或いはアフリカゾウの縄張りで狩りが行われたので、単に“出ていけ1”というつもりだったのかもしれないね」とのことでした。

もうひとつのエピソードは、メスライオンが草食獣オリックスの赤ちゃんの“育ての親”になった、というものです。それも一度だけでなく二度もです。

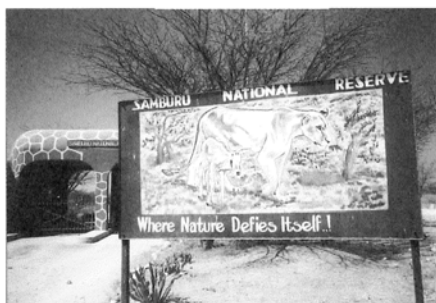


写真2 オリックスの子を見守るメスライオンの看板

ケニア北部のサンプルという地域(国立保護区)には、まっすぐ伸びた長いツノを持つ鈴羊オリックスが暮らしています。今から4年程前の冬、孤児になったオリックスの赤ちゃんに、一頭のメスライオンが寄り添って歩く姿が目撃されました。この奇妙な“母子”の姿は、三週間にわたって多くの人々の見るところとなり、ケニアの新聞にも写真入りで紹介され、有名になりました。ところが、メスライオンがほんの少し目を離れた隙に、一頭のオスライオンがオリックスの赤ちゃんを殺してしまったのです。

悲しみにくれるメスライオンでしたが、およそ1か月後に今度は別の“養子”を見つけ、オリックスと二度目の母子の契りを結びました。今度は一週間目にゲームワarden(動物管理官)がオリックスの赤ちゃんを保護し、ケニアの首都ナイロビにある野生動物の救護施設、アニマルオーファネージ(動物孤児院)へ送り届けました。

肉食獣と草食獣というこの種を超えた母性愛もまた、常識では考えることができない実話として、多くの人たちの間で論争の源になりました。

それにしても狩りの邪魔をするアフリカゾウといい、草食獣の子を養子にするライオンといい、野生の世界の不思議さを、つくづく教えられた出来事でした。

“事実は小説よりも奇なり”と昔から言われますが、みなさんはどのようにお考えでしょうか？